

多収稲の品種選定

1. 試験のねらい

近年水稻多収品種は、飼料米、ホールクロップサイレージ等の資源作物として有望視されている。そこで、飼料用イネ・多収稲用途に適した品種を選定する。

2. 試験方法

農業試験場本場の水田(厚層多腐植質多湿黒ボク土)において、以下の処理内容で試験を実施した。

(1) 供試品種

品種名	平成20年	平成21年	平成22年
べこあおぼ	○	○	○
ホシアオバ	○	○	○
クサホナミ	○		○
モミロマン	○	○	○
はまさり	○	○	○
リーフスター	○	○	○
タカナリ	○	○	
ハバタキ	○	○	
北陸193号	○	○	
あさひの夢(比較)	○	○	○
コシヒカリ(参考)	○	○	○

(2) 基肥窒素 平成20年：10kg/10a、15kg/10a、堆肥5.7t/10a、
平成21、22年：5kg/10a、15kg/10a、堆肥1.9t/10a

堆肥はおがくず牛糞堆肥。P₂O₅：K₂O=10：15kg/10a。

窒素、りん酸、加里は尿素、過石、塩化加里で施用。追肥はなし。

(3) 移植日 5月13日(平成22年)、5月26日(平成21年)、6月19日(平成20年)。

3～5本/株、栽植密度20.8株/m²で機械植え。

3. 試験結果および考察

(1) 黄熟期の乾物重は、リーフスター、北陸193号で重い傾向がみられた(図-1)。

(2) 粗玄米重は、タカナリ、北陸193号で重い傾向がみられた(図-2)。

(3) 多収品種は、登熟期間の温度不足により粗玄米重が軽くなる傾向がみられた(図-3)。登熟期の温度を確保するため、移植時期は5月上中旬頃が望ましい。

(4) サイレージのTDNは品種間では大きな差はみられなかった(図-4)。

(5) 3年間とも生育は順調であり、全区とも倒伏はみられなかった。移植日が遅れるにしたがい玄米重はやや低下する傾向がみられ、特にモミロマンは低下の程度が大きかった。モミロマンは、5月中旬移植では玄米重が重くなった。

4. 成果の要約

玄米が多収なものはタカナリおよび北陸193号、茎葉を含めた地上部乾物重が多収なものはリーフスターおよび北陸193号であった。また、窒素施肥量は多肥区ほど多収になる傾向がみられた。

(担当者 作物技術部 水稻研究室 飯田貴子*) *現 麦類研究室

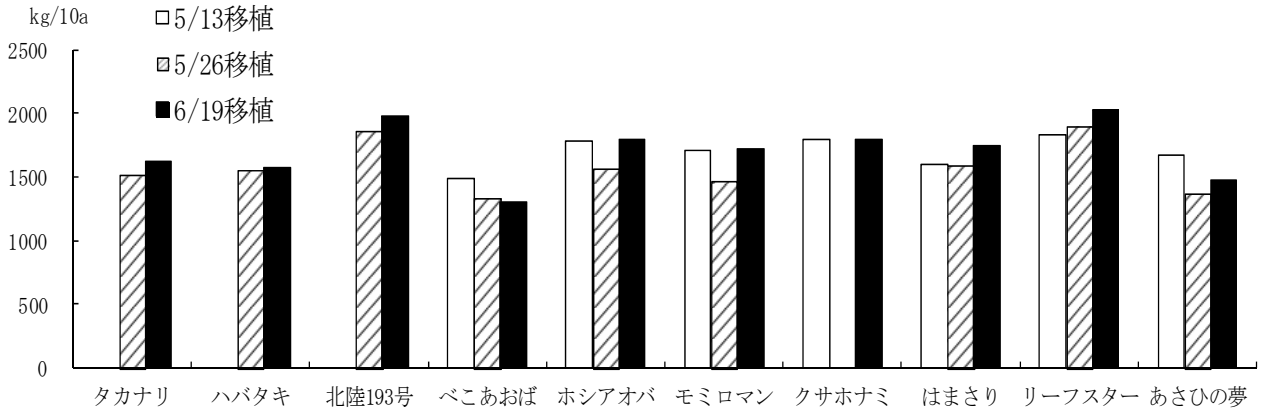


図-1 黄熟期地上部乾物重 (基肥窒素 15kg 区)

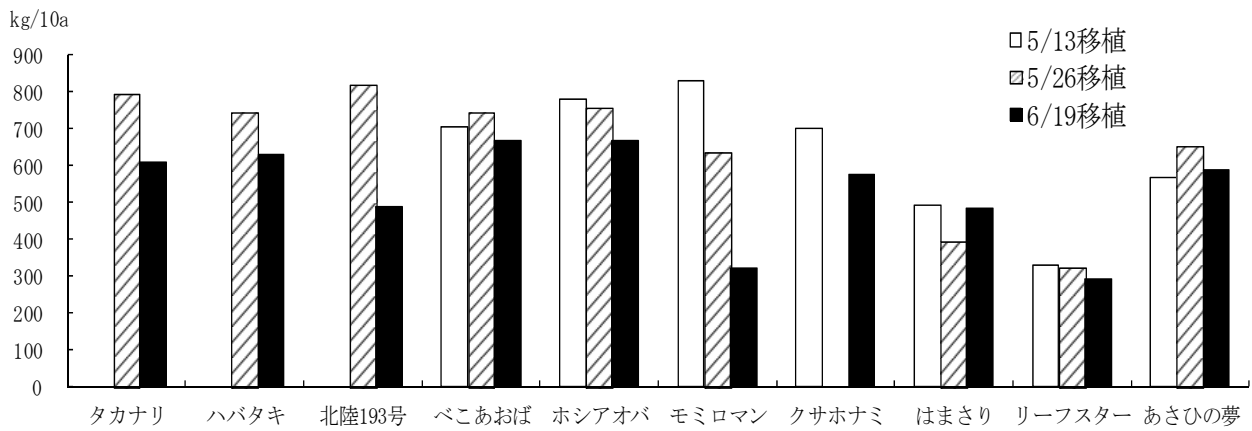


図-2 粗玄米重 (基肥窒素 15kg 区)

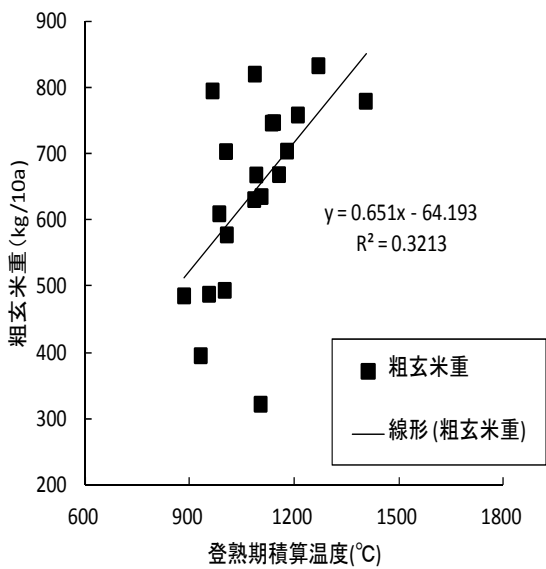


図-3 登熟期積算温度と収量の関係

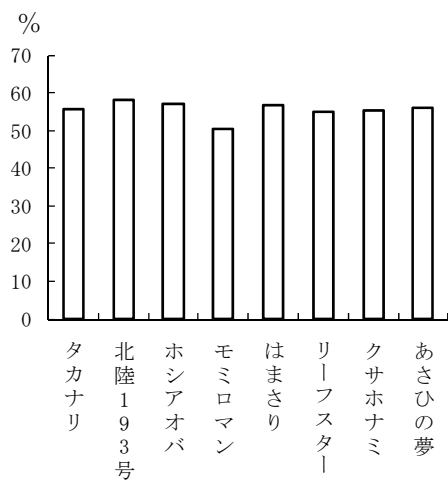


図-4 TDN (黄熟期のサイレージ: 平成 20 年)

注) TDN : $-5.45 + 0.89 \times (OCC + O_a) + 0.45 \times OCW$ (出ら、1997年)